



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2021年12月8日発行 第74号
事務局長 小島 彬
A) TEL/FAX : 077-589-3724
Email : akrkojima@ybb.ne.jp

**【書評】 畑明郎著 『イタイイタイ病発生源対策
50年史』 (本の泉社、2021年)**

個人会員分会 野口 宏

本書はイタイイタイ病の原因であるカドミウム汚染の解決に生涯をかけて取り組んできた著者 (とそのグループ) の貴重な記録である。

筆者は全くの専門外であるが、イタイイタイ病が4大公害の1つで、岐阜県にある三井金属鉱業㈱神岡鉱山の工場排水が神通川に流れ込み、カドミウム汚染された農作物を摂取した住民に重篤な骨害が発生したことは承知していた。2012年に富山県が設立した「イタイイタイ病資料館」で病名の由来となった悲惨な被害の実態などを知ることができる。

本書は1972年に結ばれた公害防止協定に基づき、今日に至る再汚染防止のための発生源対策と汚染された農地土壌の復元の半世紀にわたる取り組みを記録している。巻末の参考文献を見ると著者は1994年に『イタイイタイ病-発生源対策22年の歩み』を出版している。本書はその続編あるいは完結編であろうと思われる。

本書の内容は神岡鉱山への立入調査が開始された時期、発生源対策の研究班が組織された時期、以後今日に至る科学者グループの活動、そして今日の到達点と課題の4部構成である。その全過程の詳細な年表、200点以上の図表と写真 (著者撮影) が含まれている。半世紀にわたる資料をこれほど綿密に整理保管してきたことだけでも、著者の歴史的事業に取り組む意気込みと力量を窺い知ることができる。

宮本憲一氏は本書の帯で「公害を絶滅するために企業と苦闘し、住民・研究者を組織して汚染地域の環境再生を成し遂げた科学者の歴史的記録」「被害者の救済にとどまらずに、半世紀にわたって企業と交渉して、毎年汚染源を調査し、公害対策を改善し、川を正常化し、農地復元までに至る先進的で完璧な

著者の畑明郎大阪市大元教授」「日本公害史を飾る力作として推薦」と称えている。本書の意義はこの推薦の辞に尽くされている。

本書の記述スタイルは学術的で一見とっつきにくい。だが第1部第1章「神岡鉱山の概要」を読むと、山間部にある現場施設の配置や工程がいくつもの写真や地図や図表によってイメージができてくる。以後も容易に読み進めることができる。

第2部は8章から成り、神岡鉱山の实態把握のために組織された5つの研究班の記録である。研究班代表者に故人だが筆者の旧知の2人の名も見えて、懐かしかった。ここではとりわけ著者が属した排水班の活動に多くのページが割かれている。

第3部は6章から成り、実態把握で明らかになった6つの課題を解決するための取り組みの記録である。専門家8コース10班で編成される全体立入調査が年1回、専門立入調査は年数回。その監視と指導の下で神岡鉱山が数百億円を投じて対策を実行してきた経過とその成果が詳しく図表により説明されている。

第4部は総括で、発生源対策の総括と残された課題が簡潔にまとめられている。最初に「イタイイタイ病裁判勝訴から50年、神岡鉱山の公害防止対策は画期的な公害防止協定に基づき、被害住民、弁護士、科学者の立入調査、委託研究班と協力科学者グループの総合調査により前進し、神通川の水質は自然界値レベルになった。神岡鉱山と被害住民は緊張感ある信頼関係を構築した」と力強く宣言されている。

神岡鉱山の長年の鉱害そのものは、前著参照として本書では触れていない。だが一般読者としては被害の実態の簡単な説明も欲しいところだ。筆者としては、本書の発生源対策にイタイイタイ病の被害実態を付して1冊の新書にまとめてほしい。大きな社会的反響が期待される。